

今、商店街やテーマパークでは「昭和レトロ」が静かなブームとなっている。テレビでも1960～70年代、80年代などの出来事、商品、歌謡曲などをふりかえる番組が企画されたり、書店にもそうした本がたくさん並んでいる。博物館・資料館では「戦後50年」を機に戦中及び戦後の復興を扱った特別展を行うようになった。またその頃から、高度経済成長期に大規模団地の造成などが行われた地域では、常設展示で高度経済成長期の団地の暮らしを展示するようになった。従来の博物館・資料館の展示は、国民の大多数を占めた農村の茅葺民家を復元又移築し、そこで使われた生活の道具や生業の道具を展示することで、電化・機械化された現在の暮らしとの変化を見せようとした。昭和60年頃までは、多くの来館者がその展示になつかしさを感じ、暮らしの変化を理解することができた。しかし、昭和30年代後半からの生活変化や道具の変化は急激で、平成の時代になると、人々が暮らしの変化を実感できる展示物は農村の風景や農具ではなく、サラリーマン家庭の居間や台所へと変わってしまったのである。居間にはテレビが置かれ、さまざまな番組を通して、時代を彩るスターが茶の間に現れた。また台所にはいくつもの電化製品が家事労働を軽減し、女性の社会進出を助けた。大量生産・大量消費の社会は、日本全国、同じモノを使い、同じ流行を共有するようになった。



昭和20年代の県営住宅の茶の間
(香川県立ミュージアム)

従来、博物館・資料館において、くらしや生活を扱ってきたのは、民俗学であった。民俗学は「常民の学」「経世済民の学」を標榜し、人々の日々のくらしの中に、日本人の特徴・民族性を見出し、明日のより良い未来を照らし出そうとした。その研究範囲は、衣食住・生業・人生儀礼・年中行事・信仰・芸能をはじめ、日本人のくらしのすべてを対象とした。しかし、いつの間にか、高度経済成長期以前の姿・習俗など、少しでも古いくらしぶりを調査することばかりに没頭し、現在のくらしに目を向けることがほとんどなくなってしまった。もちろん、現在学として、くらしや地域社会の変貌、団地の民俗、都市の民俗などに目をむけた研究もされたが、博物館・資料館においては、相変わらず「民具」と呼ばれる手作り、または職人が作った古い道具、使わなくなった道具の収集と保存に追われた。高度経済成長期以前のくらしや風習が消え去りつつあった昭和40年代以降、そうした収集方針は、確かにその地域のくらしや文化を保存したり研究する意味で重要な仕事であった。ところが今、博物館・資料館には、昭和30年代以降のどこの家にもあった電化製品やプラスチック・ナイロン製品などの大量生産品は、ほとんど収蔵されていないということになってしまった。高度経済成長期以前のくらしは復元できても、それ以後のくらしを復元することはできないのである。博物館で展示されるくらしの道具、それは今生きている多くの人々が経験の中で使った道具とは、あまりにも乖離・隔絶してしまったのである。

電化製品や機械製品は、設計図さえあればいつでも復元できると言われてきた。確かにそうかもしれない。しかし、あまりにも多くの製品が生み出され、使われ、捨てられてきた。そしてそのサイクル・流行はどんどん短くなってきている。今回の特別展にあたり、同僚が各家電メーカーに型番などを手がかりに製品の問合せをしたところ、どのメーカーもとても素早い回答をいただいた。しかし、問い合わせたもののうち、そのほとんどが「資料が残っていない、特徴など詳しいことはわからない」というものであった。技術史・産業史的には厳しい現実がそこにある。もちろん歴史系の地域博物館が、こうした電気製品にどのように向き合うかは単純に結論はでない。何でもかんでも種類が違えばすべて集めるのか。収蔵庫に空きスペースがない…など。

しかし、今回の展示調査においてもいくつかのことがわかった。残りやすいもの、残りにくいもの…。テレビやステレオ、ラジオ、ミシン、編み機などは使わなくなっても意外と残っている場合が多いが、洗濯機、冷蔵庫、

掃除機などは、なかなか残っていなかった。近年の家電リサイクル法のことなどを考えると、今後、ますます大型家電・白物家電は残りにくくなるのではないかと推測される。また、核家族化が言われて久しいが、今、核家族を営んだ主役たちが高齢化し、この世を去りつつある。もちろんその子どもたちの世代も、多くは核家族を営んでいるため、親たちが亡くなり、その生活を支えた道具・家電製品はもちろん、家の歴史を刻んだ家屋や土地の処分にも迫られている。捨てるのか、売るのか、継承するのか、それとも博物館・資料館へでも入れようか、とりあえず使っていない部屋にでも置いておこうか。当館への資料寄贈の希望も、そうした事情による案件が少しずつ増えてきている。

今、自分たちが使った道具や用具などを見たり触れたりしながら、昔のことをふり返り、脳を活性化させるという「回想法」が注目されている。旧師勝町(現北名古屋市)歴史民俗資料館で試みられ、少しずつ全国に広がりを見せてきている。これまで博物館・資料館が集めてきた民俗生活資料を、現代社会が直面する認知症などの予防・治療に役立てるといえるものである。県内でも三豊市詫間町民俗資料館では、市内の医療機関によるそうした利用が年に数回あるときく。今日まで博物館・資料館が収集してきた民俗資料(民具)が、今の高齢者にとっては「なつかしさ」を感じ、認知症対策にも効果をもたらすというのである。しかし、あと10年、20年が経過し、戦後世代が高齢者となったときに、果たして博物館・資料館の収集資料は「なつかしさ」を提供できるだろうか。博物館に、「回想法」が可能なものが収蔵されているだろうか。無論、日本人の民族性を明らかにするという本来の学問、資料の収集目的からすれば、そんなことを考える必要はないのかも知れない。しかし、時は流れ、昭和が終わりをつげ、すでに20年が経過した。にもかかわらず、昭和30年代以降のくらしをモノでたどれるだけの資料を博物館・資料館は収集できていない。今後、未来の博物館・資料館のあり方を見ずえて、どういったものをどれだけ収集していくのか、しっかりとした収集方針を持つことが必要であろう。また、これまでの博物館・資料館では、そのほとんどが受動的収集であったが、今後は館の主体性をもった能動的収集が重要となってこよう。

蛇口をひねれば水が出る。いやお湯も出る。スイッチ1つで電気もつき、お風呂にお湯をはることもできる。ご飯を炊くのも、暖をとったり、涼んだりするのもすべてスイッチ1つ。そんなくらしが当たりまえとされている若い世代にとって、電化以前のくらしの道具—そこには自然との共生の中で培ってきたさまざまな知恵と工夫がつまっている—を収集し、それを後世に伝えていくことは、環境問題やエネルギー問題などが声高に叫ばれる今、ますます重要になってきている。

県内には、各市町に資料館が置かれている。専門の職員の配置や予算はさびしい限りではあるが、意欲的に資料を収集し、それを活用している館もある。三豊市詫間町民俗資料館が小学校3・4年生を対象に行っている「昔の道具」の体験学習(校外学習対応)は、全国的に見てもトップクラスであろう。多度津町やさぬき市、東かがわ市などの資料館もがんばっている。まんのう町のボランティアグループによる小学校と連携した米づくりの学習や農具を動かしたり、使ったりさせる活動もすばらしい。

是非、県民の皆さまには、そうした地域の資料館に関心をもってもらい、自分たちの町の民俗や歴史を、自分たちの手で保存し、伝えていっていただきたい。また、電化製品をはじめとする新しい生活用具も収集し、昭和の後半の急激なくらしの変化をモノでたどることができるよう将来に備えていただきたい。この展覧会が、「そういえば自分の家にもこんなものが残っている」、「これは家で大切にしておこう」、「資料館に寄附して未来に伝えてもらおう」、といった地域の歴史、家の歴史、家族の歴史、自分の歴史を顧みる契機となれば幸いである。さあ出かけてみよう、わたしたちの町の博物館・資料館へ。

(当館主任専門職員 たいよしあき)



三豊市詫間町民俗資料館校外学習風景